立ち読み版
ママンな恋人はいかがですか？
小説 089タロー
挿絵 かんみつ

序　章　いきなりママは困ります？　006
第一章　ママとの暮らしはドキドキですか？　029
第二章　ママのお仕事は筆下ろし？　058
第三章　ママは激しいのがお好き？　096
第四章　ママはムスコを取り合っちゃう？　140
第五章　ママは恋人志願？　183
終　章　僕のママはママだけじゃイヤ？　245

登場人物紹介

Characters

神楽(かぐら) 麻耶(まや)

おしとやかな雰囲気の、古式ゆかしい和服美人。実家が茶道の家元であるため、考え方も少し古風。

樹(いつき) 陽向(ひなた)

崇之のクラスメイト。崇之のアパートの管理人の娘で、彼を弟のように慕っている。姉御肌で感情を隠さない。

リスティ・スタンフォート

お金持ちのお嬢様。アメリカ人だが、日本語が上手で文化への造詣も深い。高飛車でちょっぴり傲慢なところも?

向井(むかい) 崇之(たかゆき)

少し流されやすいところがあるものの、いたって優しい普通の少年。父子家庭で育てられた。

「ぁあいけませんっ、胸など――ああっっ！」
しかし獣性に火がついた少年は止められない。寝間着の前が左右に開かれ、青白い胸元が曝け出されてしまう。
「あああ、これが麻耶さんのっ！　オッパイっっ」
乱暴に剥かれた胸元には、和服らしくブラジャーなどなかった。
隠されていた乳房は予想どおり小さくて、ある意味歳相応という感じ。けれど緩やかな膨らみ具合は細い身体とマッチしていて、お腹や脇腹まで一緒に撫でたくなる可愛らしさ。また、薄い起伏の頂点は淡い朱色で、プックリと膨らんだ丸い小粒が妙にいやらしい。
子供のように、その小粒にプチュッと吸いつくと、求母本能を満たす不思議な感覚。そのまましゃにむに舌で転がすと、汗ばむ裸半身がピク！　ピク！　と悶え跳ねた。
「はあっ、はううっ！　いけませ……わたしっ、崇之さんの母ですぅ、っっ」
「ちゅちゅっっ。ぷはぁ、でも麻耶さん、オレ我慢できないっ！」
意を決した彼は、もう拒まれてもやめようとはしなかった。薄い脂肪の乗った小さなオッパイは、感度も良好なのか吸引するたびに悩ましい反応で応えてくれる。
このじれったい股間。あの、女体内での極上の快楽。ついに知った悦びが雄の飢えをより強くして、もう女の胎内でしか満足できなくなってしまうのだ。
「はぁ、はぁ、オレ、麻耶さんとシたいっっ」

経験未熟な少年は、がっつきながら乙女の股へと手を伸ばす。すると、長襦袢に包まれたその一帯は、暖かい湿り気を帯びていた。

「麻耶さん、濡れてる？」

「はぁ、はぁ、だめ、だめですぅっっっ！」

眉根を寄せて堪える彼女は、感情に溢れていてとても可愛く魅力的。しかし首を振るのとは裏腹に、ピクピクと悶える全身は感じていることを如実に語っていた。

（や、やっぱり感じてる。いいんだ、麻耶さんを襲っちゃっていいんだ！）

時折思い出したように拒絶するも、あくまで軽く押す程度で本気ではありえない。むしろギュッと瞳を閉じて熱い吐息を繰り返す様は、本当は求めているように見えてならない。

「麻耶さん……見てもいい？　ってか、見るよ？」

たぶん口ではダメと言うに決まっている。だからちょっと強引に布団を剥いで身体を入れ替え、女体と上下逆になる形で股間を覗きこむ。

乱れた襦袢の合わせ目からは、眩しい太腿がチラついている。布地も濡れているが、内腿にも少しだけ雫が伝っていて、キラキラしているのが物すごく淫らに思えた。

まるで、見えないところで性欲を堪える清楚な仮面の若女将のよう。こうして暴かれると股を濡らして男を欲してしまう。

少し粘つく内腿をなぞると、少年の股間前から、あっ!?　という悲鳴があがる。それが

また堪らなく興奮材料となって、崇之はそっと襦袢の合わせ目を開いていった。
――ススゥ……っっ、ハラリっっっ。
「っっ!!　麻耶さんっ、パンツ穿いてない……ぁあビショビショのオマ〇コが丸見えっ」
「はあああっ!!　みっ、見ないでぇ……！」
優しく左右に暴かれた乙女の秘所には、ますます和服らしく下着が存在しなかった。開かれた内側はすぐに肉づきの薄いほっそりした太腿があり、小振りなヒップもプリプリと柔らかそうで歳相応に可愛らしい。そして股間の三角地帯は、緩い開脚にて儚く男を求めていた。
日焼けも無縁な肉の丘には、中央に小さな細い亀裂が。まるで切り傷のような奥からは、薄い色合いの肉花弁がぴらっ、と可愛く花咲いていた。
（すごっ！　おっオマ〇コ見える。誰だよグロいって言ったの、ぜんぜん綺麗じゃんか！）
リサのときとは違い今回は自制しながら拝むことができた。さらに布を退けると、光が入って十分な潤いを見て取れる。けれど、あるべき性毛だけはどこにも見当たらなかった。
「ツルツルなんですね？　か、カワイイっ」
「いっいやぁ、言わないでぇっ」
感想を聞かされ少女は恥じらい顔を覆う。しかし、普段とは打って変わった悩ましい態度に雄の心はますます沸騰させられる。

まさに精巧な人形のようにツルツルの臀部と陰部を、まずはじっくりと視姦する。強引に股を開いて顔を寄せれば、乙女の鳴き声がさらに強まる。

「すごい、オシリの穴も小さくってキレイっ。麻耶さんのココってこんな風なんだ？」

「はぁ、はぁ、っっ、もっとご覧ください……あっ⁉　いえっだめですっ！」

つい本音が出てしまったのだろう。女からは求めないと言いながらも、やはり抱いてほしいに違いない。

ともあれ本音であることくらいは察したし、目の前の肉の花弁はムワッとした不思議な芳香を放つ。鼻の奥が熱くなって、彼は眼下の乙女股に吸いついた。

――ぷちゅっ！　ぷちゅちゅっっ！

「っああ⁉　はあぁ～～～～っっ！」

肉の隙間を吸引すると、麻耶はあられもない嬌声をあげた。晒された腰を跳ね上げ、はしたなくエビ反りになりながら。

けれど濡れた入り口を荒っぽく舐めると、次いでビクビクと下腹を痙攣させる。あっ！　あっ！　と悲鳴をあげて、いかにも感じているように。

（やったっ。麻耶さんを気持ちよくさせてるんだ！　それにオマ〇コって、ちょっと臭うけど甘酸っぱくてクセになりそうっ）

初めて味わう女性の膣は、香りの強い濃厚なもの。どこか限界まで熟成させた蜂蜜を思

わせる味で、最初は戸惑うも、舐めれば舐めるほど味わい深くなるドキドキものの熱淫蜜。
しかも触れると亀裂は嬉しそうにヒクついてきて、内側の桃色を見せてくれるのだ。リサよりも薄いビラビラと小粒のような肉芽が顔を出して、生の女を深く印象づける。
もちろんこれもいい匂いで、犬のように舐めまくる獣欲少年。そして敏感な粘膜を勢いよく味見された襦袢少女は、清楚な仮面をかなぐり捨てるように大きく身悶えして跳ねた。
「はぁああ〜〜〜〜っっ！　だめっ！　いいっ！　気持ちいいっっ！」
それはもはや人形のようではなく、頬や額を汗ばみ火照らせた性感漂う女の素顔。
いつの間にか、少年は少女に上下逆で完全に覆い被さっていた。そして仰向けの彼女の眼前には、今やギンギンに猛り狂ったズボンの勃起テントが。
「ま、麻耶さん、オレのも頼みますっ」
「はぁ、はぁ、はあ、っえ？　ああっっ？」
刺激のないもどかしさに堪えかねズボンを下ろして股間を突き出す。半脱ぎのソコからは、リサに褒められた立派な男根がビンッ！　と弾け出る。
「っっっぁああ、た……逞しいっ。これが、崇之さんっっ！」
「麻耶さん、あの……な、舐めて？」
普段なら躊躇うどころの話ではないが、煽られた獣性が今は理性を薄れさせる。噂に聞くフェラチオを試したくて、少女の口に男根を迫らせてしまう。

眼前に迫る、まだ経験は浅いが硬い肉棒。本来は忌避されそうな請求は、だが性感に悶える少女の唇にそっと含まれる。

「ごくりっっっ！　は、はぃ……ぁむっっ」

ちゃぷっ、という音を残して、いきり立つ肉根が乙女の口内に収まる。途端、ゾクリとした心地よさが芯まで響いて少年は至福を覚えた。

「あううっ？　きっ～～気持ち、いいっ。麻耶さんの口の中、ヌルヌルしててっっ」

膣内とはまた一味違った柔らかい舌が、すぐにも亀頭にまとわりついて気持ちよすぎる。

入って最初はツルツルの舌先が先端を舐めて、滲んだ汁を塗り広げてくれる。ヌメリが強まったところを今度はザラつく舌腹でなぞられて、まるで何かが這い回っているみたい。

（ああっでも気持ちいい！　匂いで頭クラクラするのにフェラまでしてもらってっ！）

噂のシックスナインという体勢だろう。互いの股間を目に焼きつけ、舌で慰めている。

「んっ、ちゅるっっっ、んふっ、はふぅぅ……んっ⁉　んん～～っ！」

「れろっ、ペロペロっ、つぴつぴちゅぷちゅぷっっ」

眼下の肉裂は味わうたびに色合いを増していき、興奮の汁をトプトプと溢れさせる。肉の花弁は生き物のようにヒクヒクと蠢き、突き刺す舌にヌルリと絡まってくる。

零れる蜜はキツイ果汁のように甘さと酸味があって、啜れば啜るほど味わい深くなっていく。そして濃密なそれを、肉ビラをかき分けて奥まで吸いこむと、麻耶の肢体は淫らに

悶え狂うのだ。
「はあはあっ！　はむっ、ちゅううっ、くぷくぷずずっっっ」
「ううっ⁉　ああっっ！　ぅはあ、ぶちゅぶちゅじゅじゅうううっっ！」
「んむうううううっ⁉　んん～～んんんっっ！」
潤う入り口を責められた少女は荒い吐息でくねり踊る。お返しとばかりに勃起吸引されれば、次は少年が悶える番だ。
経験があるのか否か。未熟な彼には分からなかったが、麻耶はペニスを深く頬張ってタップリとしゃぶってくれる。舌が裏筋を這って濡れた肉感が物すごく快感だし、唇は傘裏を優しくシゴいて性神経を甘く痺れさせる。
――ちゅぷっちゅぴっ、くちゅくちゅくちゅりっっ、ビクッビクッ！
もはや二人は熱に浮かされたように互いの性器にむしゃぶりついて責め合う。どちらも寝間着はシワクチャに乱れており、少年は下半身を、少女は胸と股間を丸出しにして、互いに恥部を頭部で隠し合っている。
しかも少年のほうは荒々しい衝動にも火がついていて、上から腰をズンズンと押しつけていく。
――じゅぷっぐぷっぬちゅっぬちゅっっ！
「んんふぅ、ふぅ！　ぁあ麻耶さん、いぃ、いいっっ！」

「んぶっ、じゅるる――っはあはあ、硬い、ぉ……ぉいしぃっっ！」
なのに麻耶は、犯すような動きにも必死に応じて深いフェラチオをしてくれた。
喉の奥をトンっと小突くと、キュッと締めつけられて心地よい挿入感を味わえる。迫る射精欲で引き抜こうとすると、今度は唇が吸いついて逆に熱感を高められてしまう。
「ああダメだっ！　オレ、もうすぐイクっ。麻耶さんのお口でっ」
経験浅く初めての唇淫では、長保ちする崇之ではない。縦横無尽に舐める口内は息吹もかかって堪らなく気持ちいいから。
さらに、艶かしく腰跳ねる麻耶の情熱が、彼の引き金を急速に絞らせた。
「はぁあイって、イってください、ああわたしの口にぃっっっ！」
絶頂を許す乙女の舌が、ツタのように深く絡みついた。敏感なエラの裏側を舌先で刺激しつつ、カリをキュッと頬で締めつける。
そこで精液が管を昇り、最後に朱唇でヌルリと吸いこまれると――ビクビクビクウ！
「っっ～～ぁああ！　イク！　イクううっ！」
――びゅぶっ！　びゅぶびゅぶドプドプううっっ！
「んぐう⁉　んぐぶっ～～はあぁあ～～～っっ！」
いやらしく乙女の口内を楽しんだ男根が、とどめとばかりに樹液の洗礼を吐き出した。
まるでポンプの水が爆ぜるように。

頬張っていた女の口内が一瞬でプッと膨らみ、濃厚な興奮の証が真っ白に染め上げる。熱い噴射を喉で受け止めた麻耶は、激しい勢いに小さな唇を押し倒され、最後は離れた顔射で汚される。

「はぁっ、ぁぁぁ……！」

――びゅっ、びゅびゅっ、びちゃびちゃっっ。

受けきれなかった白い残滓が、少女の淡い唇周辺に雨のように降り注ぐ。つやのある肌と喉元も男の欲望が滴り、見るからに淫らで妖艶な乙女。

「はぁ、はぁぁっ。ご、ごめんなさい、麻耶さん……」

腰をヒクつかせグッタリしている彼女の姿は、乱れているのにとってもエロティックで見ているだけで本能を撫でられる。でも、こうまで『犯した』ような様相は、熱が下がると少し罪悪感も掠めてきた。

（ああ、でもっ。麻耶さんの口と胸元、精液でベットリ。オマ〇コもヒクヒクしてるし、すげぇエロいっっ！）

まさに、レイプされた清楚な美少女のよう。長襦袢はすでに隠すものを隠さず、腹帯一本で繋がっている状態。丹念に舐められた恥裂付近は唾液と愛蜜でベトベトで、まるで呼吸するような肉唇が恐ろしく淫猥だった。

おかげで若いペニスは再びムクムクと力をつけていったが、罪悪感はごまかさずに心配

して覗きこむ。

「はぁ……はぁ……よ、よいのです。それが、殿方のあるべき姿。本物の男は――女を力強く押し倒すものです。はぁ、はぁ」

口を犯され、恥部を探られてしまった和装少女は、しかし――微塵も嫌悪を示さなかった。それどころか、未来の息子の行為を肯定し、蕩けた眼差しで続きをすら促してくる。

「っさぁ、崇之さんの思うままに。母とて……女。殿方に求められてこそ幸福」

「っっ！　ま、麻耶、さんっ。オレ、オレっっ！」

（もう、堪んないっ！　こんなになってもオレでいいって言ってくれてっ！）

まるで、罪を許してくれる聖母のような甘く美しい微笑み。今までの無表情の下には、こんな優しさと母性が隠れていたなんて！

思えば麻耶は、感情を見せない裏側で、崇之のことをとことん甘やかしてくれた。ある種過保護なくらいに。

そしてエッチでも甘やかしてくれるというのだから――清楚な乙女の中にまで甘えてみたくなってしまった。

だから崇之は、意を決して、未来の母の両足を左右に開くのだった。

「いっ、いくよ麻耶さん？」

仰向けのところを、腰を抱えられ覆い被さられ、彼女は無言でコクっ、と頷いた。
許しを得た少年が、いよいよ本格的な性行為へと及ぶべく、濡れた恥裂に肉根を添える。
（あぁぁ、わたし、崇之さんと、夜伽をしてしまうんだわ）
必死に動揺を隠そうとする麻耶。けれど、彼――未来の息子に秘所を愛でられるのは、予想以上の女の愉悦があった。だから、さらなる深い領域も熱く望んでしまい、こうして股を開いて受け入れようとしている。
もっとも、彼女は無自覚だが人形のような仮面はすでに剥がれ、今は情欲に熱した女の顔となっていたのだが。
そして疼く膣唇に、彼の雄々しい性器がプチュリと接吻してくると、優しいお尻が恍惚に揺れる。これは、本能を蕩けさせる『女になる』予感。
そんな彼女の精神など知りようもない義子少年は、何度か入り口を探りながらゆっくりと押し入ってきた。
――ぬちゅりっ、ぬむぬむぬぅ……っつぷっ。
「ああ、っっ！　な、なんか、引っかかるっっ？」
「はあ、はあ、はあっ！　かっっ構いません、どうかそのまま……！」
「うっ、うんっ」
――ずぶっ、ずぷぅぅぅ……ブツッ！

「っ〜〜‼　かはぁ……っっっ！」

肉先が入り口付近を通り、薄い何かを突き破った。途端、鋭い痛みが膣内を駆け抜け、麻耶は我知らず歯を軋らせていた。

「ま、麻耶さん？　どうしたんで――あっ⁉」

我慢する態度を隠しきれなかったのか、番（つがい）の少年が心配そうにする。そして繋がった秘股を見られたとき、ついに現実を悟られてしまう。

「ちっ血⁉　まさか……麻耶さん⁉」

「〜〜〜っ、い、いいんです。続けてくださいっ」

（ああ、やっぱり破瓜のときは流血してしまうんですね。崇之さんに初物（はつもの）と知れてしまいました……）

知れば躊躇うに違いない。崇之は根は甘えん坊だが優しいことを麻耶は感じ取っていた。だからこそ誘惑し、関係を許す気になれたのだ。もちろんリサへの対抗意識も多分にあったが、彼の母として抱かれる覚悟に微塵も偽りはなかった。

「さ、さぁ。殿方なら、躊躇わずに……っ！」

「ま、麻耶さん……分かりました。いきますよっ」

しばし呆然としていた崇之だったが、潤んだ瞳にせがまれると、覚悟を決めたように腰を振るい始めた。

――くちゅっ。くちゅっくちゅっ、ちゅくっちゅくっっ。
「あっ⁉　あっ、あっ、あっっっ。す、すごい……これが、殿方……！」
まだ深部に届くほどの結合でもなかったが、それでも膣内の広がる感触に麻耶は当惑を隠せない。
入り口付近はズキズキと鈍痛が残るものの、それ以上に、繋がる感覚は女としての強い充足感を与えてくれる。
（すごい、処女膜は痛むのに、他はすべて擦れて……あ、熱い……！）
敏感な膣粘膜を、熱いっぱいの肉勃起で埋められ、こすられる。そのたびに、散々舐められた肉襞が悦びの悲鳴をあげ、胎内に強い淫感を伝えてくる。
初めての中は愛撫で十分に潤っており、躊躇うような彼の突きこみをヌルヌルと潤滑に受け入れていく。また、ヌチャヌチャという卑猥な水音も、羞恥と性感を刺激して乙女心を熱く揺さぶった。
「はぁ、はぁ、い、いかがです、か？　わたしの、中は。あっ、悦んでいただけますか？」
初物の自分が彼を満足させられるかどうか、正直いって自信がない。それでも懸命に腰を揺すると、少年はウウっと呻いて気持ちよさそうにしてくれた。
「い、いいですっ！　麻耶さんの中、狭くって濡れてて、気持ちよくって痺れますっっ」
腰振る彼は、まだ不慣れな感があって乙女心を甘く誘惑してくれる。

それは――麗しの彼女が、ついに一線を超えることを許してくれた瞬間だった。
「ノー、ヒナタ、タカユキ……ッッ！」
「ヒナタさんっ、あなたも……っっ！」
ライバル義母たちのおののくような声。それすら静寂と化し、熱病のような眼差しが男女の間を交差する。
やがて、丸く開かれた入り口がぴちゅり、と鈴口にタッチした。分かるのは、あまりにも美しいベビーピンクの媚粘膜と手前に見える小さな肉粒、そしてゆっくりと沈んでくる、ふっくらと丸みのあるお尻だった。
「んっっ！　た、タカくん、いくよ？」
「ぁあヒナタ――あっ？　ああっっ？」
カリ先の心地よい肉感触が、ゆっくりと下りてくる。ここ最近知った肉の抱擁感が、グミのように包みこんでいく。
――ぴちゅっ、ツプツプっっ、ぬむっ。
「ううっ、んっ、ぐ……！」
ゆっくり、ゆっくり、かすかに濡れた粘膜の波に尖った亀頭が飲みこまれていく。それは少年を甘い非現実感へと誘いながら、同時に少女の美顔を静かな苦悶へと変えていた。
やはり問うまでもない。ヒナタはバージンなのだ。その証拠に、亀頭が飲みこまれたと

ころで微弱な抵抗が薄壁となって立ちはだかった。
「はあ、はあ、はあ、はあっ！」
「ああ、ひ、ヒナタ、これ、これってヒナタのっ？」
このプニプニ感こそが、きっと処女膜に違いない。麻耶のときはわけも分からず貫いてしまったが、前夜の経験が膜の弾力を気持ちよく実感させる。
自分は、姉のような存在を『女』にするのだ。そう思うと、鳥肌が立つような興奮。
「ノー!!　ヒナタ、ユーっっ!?」
「ひ、ヒナタさん、あなたまで母にっ!?」
「はあっ、はあっ！　み、見ててねタカくん、わたしも、お母さんになってあげるからあ、っっっ！」
ブラウンヘアの幼馴染の健気な宣戦布告と共に。
鈴割れを包む心地よい肉膜が、グッとトドメの一撃を加えられた。
――みちっっ、っっブツっっっ！
「ひぐっ!?　っっ～～～～ぁぅ～～っっっ!!」
ついに――姉弟のような関係に、大きな変化が起こされる。
姉のような美少女の処女が、弟のような少年に捧げられたのだ。未開の処女域が肉根によって一気に押し広げられ、胎内に鈍い破膜音を残す。

そして膣唇からは、乙女の証だった少量の流血がツゥ……と静かに伝い落ちた。
「あ、あああっ。オレ、ヒナタのバージン、もらってっっっ」
(ど、どうすりゃいいんだ？　嬉しいけど、けどっ、どんなカオしてればいいんだっ？)
恋人になったわけでもない。むしろ母子になりそうであって、恋愛からは遠ざかったと言える。しかし深い男心は喜びも隠しきれず、疼痛のような葛藤に苛まれてしまう。
それに涙すら浮かべて苦痛に耐える彼女の姿は、否応なく罪悪感を掻き立てる。
「なっっなんてコトっ、ヒナタまでタカユキと！　ママはワタクシだけで十分ですのに！」
一方、精液まみれで揉めていたリサは、自分が味わうはずだったペニスを取られて歯を軋らせていた。
白く汚れたビッグバストを、ぶるんぶるんと揺すって怒る。また麻耶も、白濁の残る口元と乱れた寝間着姿で憤懣やるかたない。それこそ、『あなたが邪魔をするからです！』とでも言いたげな横目でリサを睨みつける始末。
しかし二人とも、自分を棚に上げてヒナタを責めることはできなかった。どちらも色仕掛けしたのは違いなく、競い合っても非難は筋違い。しかも考えようによっては、これで三人とも後ろ暗い事実を共有することにもなったのだから。
ともあれ、そんな悔しがる二人をよそに、崇之はヒナタの膣内感触をじっくりと味わっていた。

（やっ～～柔らかいっ。絶対初めてで狭くてキツキツなのに、すごいフワフワっ）

非処女のリサよりも確実に狭く、サイズはたぶん麻耶と大差ない。けれどすごい密着度なのに表面は柔らかく、隙間ないのに物すごい包容力。

どこか、表向き厳しいのに本当は甘い彼女の性格を形にしたような――不思議な優しい性快感。触れるだけで愛おしくなるような、フワリフワリと抱きしめる柔襞。

「はぁ、はぁ。っじゃ、じゃあ、動くね、タカくん？」

「ヒナタっ、ムリしなくても……あううっ⁉」

――ぬちゅりっっっ、ぬちゅりっっっ……。

気遣う態度は、しかし功を奏さず、ぬめる水音と結合の快楽に遮られる。

処女らしく痛みを現す女体ではあるが、それでも懸命に全身を上下させてくる。ゆっくりとペニスが飲みこまれ、桃色の内側に消えていく。

（きっ～～気持ち、いぃ。これがヒナタのオマ〇コ、ヒナタとの初エッチっ！）

はっ、はっ、はっ、と息荒く腰振る彼女。その健気な動きと処女膣愛撫は、揺れる男心を熱い恍惚で前後不覚にさせていく。

濡れた谷間に勃起が刺さり、まるで別の生き物のよう。しかし、じゅぷっ、じゅぷっ、と飲みこまれるたび、物すごい快感を全身に伝播させてくる。性感が蕩けサオとカリが気持ちよすぎるのに、ただただ彼女に任せて、柔らかい膣粘膜を味わうことしかできない。

「はぁ、はぁ、っど、どう？　気持ち、いい？　はぁ、あっっ」
「う、うん。すごく、気持ちいい……」
再び視線が絡み合い、またも二人だけの空気が流れる。痛いはずなのに一生懸命感じさせようとする彼女の姿は、もうそれだけで熱い想いでいっぱいにさせてしまう。
――じゅぷっ、じゅぷっ、ちゅぷっ、ちゅぷんっ……。
いつしか二人は言葉もなく、互いに腰を動かすようになっていた。少年の瞳には少女しか、少女の瞳には少年しか映らず、秘めた想いを伝えあうように穏やかなセックスを連ねていく。
だが、自分たちそっちのけの甘い空気を、残りの二人が看過できるはずもない。
「クッ！　ヒナタ、早くお退きなさいっ。ソレはワタクシがっ」
「い、いいえっ。息子の性処理は母であるわたしがっ」
などと牽制しあいながら、騎乗位少女に迫る美女たち。二人とも太腿を悩ましく擦り合わせ、息子の男根を思い出して物欲しがる。
リサのジーンズは股間からネチリといやらしい音がするし、麻耶の太腿は妖しく覗いて内側に雫を垂らしている。
「あっ、あうっ！　ダメ、タカくんのお母さんは、わたしっっ、あうんっ！」
「アァ、モウッ。なんでヒナタをっ。ワタクシのほうがバストもビッグでしてよっっ」

なおも男根を搾り続けるライバルを羨み、金髪美女が相手の乳房を掴み上げる。一度は気圧され傍観したが、次第に熱っぽくなる男女を前には、さすがに引き下がれないらしい。

「ホゥラ、ワタクシよりも小さい。コレはたぶんFカップくらいかしら？　ワタクシのHカップには及びませんわ」

「あ、あぁあんっ、イヤっ、揉まないで、揺らさないでぇぇ、っっ」

背後から乳揉みされてしまい、騎乗位少女は恥じらって身悶える。

乳首も顕な白い乳房は、同性の揺さぶりを受けてポヨンポヨンと優雅に弾む。両掌で持ち上げられると上下運動も相まって、実に巨乳な揺れっぷりで少年の欲求を高めてくれる。

「ぅ、確かに大きいですね。ですが、乳の魅力は大きさだけではありません。感度の悪い女は飽きられますわよ？」

続いて麻耶までがヒナタのバストを覗きこんだ。そして意味ありげに口元を歪めると、桜色の小さな突起を、ぷちゅっ、と唇でついばんだ。

「いやんんっ⁉　ああん！　あふぅ、ムネ、乳首ぃぃっ、ぃやぁあああんっっ！」

オッパイの性感を刺激されて、堪らず可愛い悲鳴をあげてしまうヒナタ。

だが、それで容赦する二人ではない。朝一番のムスコを奪われたことが日米美女たちを妬みで燃え上がらせたのだ。

「まぁ、意外と感度もよいようですね。可愛い顔してはしたない。ちゅっ、こりこりっ」

「ひゃあああんんっ!?」
「なかなかイヤラシイですわ。散々オナニーで開発したんじゃありませんこと？　ホラホラッ」
「あふう！　はふうんっっ！　ち、ちが、そんな――いやあああんんっ!!」
豊かに実った乙女の果実が、同性たちに淫らにもてあそばれていく。乳首を甘噛みされ、アンダーラインを何度も揺すられ、眩しい裸身が汗を散らして悩ましくくねる。
リサは自分の優位性の証明を、麻耶は牽制をしたかったのだろう。初めての性感に悶える乳肉を、指と前歯で執拗に責め立てていく。
しかし、これは意外と逆効果だった。
「ヒナタの胸、やっぱり大きいっっ。Fカップのオッパイがエッチに揺れてっ！」
男には、ただ大きいという漠然とした感覚しかない。そこへ立派なサイズを語られると、否が応にも欲情は強まるというもの。それに性感に惑う女の姿も、男にとってはこの上ない起爆剤であった。
触りたい、揉みたい。この可愛らしい処女のFカップバストを！
そんな性欲に誘われるまま、思わず手を伸ばして乳肉を掴んでしまう結合少年。触れた瞬間の暖かさに昂ぶりつつ、若い膨らみをモミモミと味わっていく。
「あんっ!?　っっはぁ、はぁ、たっ、タカくん、そんなあんっ！」

「はぁ、あぁ、気持ちいいよヒナタ、柔らかくて大きくて、ああクセになるっ！」
大きな乳房は母性の象徴。だが男心はそれだけでは動かず、恋慕があって初めて強い情熱となる。だからヒナタの巨乳Fカップは、サイズは劣ってもリサと遜色ない興奮がある。
何より、彼女の乳肉は張りのあるリサと比べると、物すごい柔らかさだ。あまりにも深く指が埋まり、ムニュムニュと形が変わってビックリするほど艶かしい。それに揉んでいると、悩ましい動きと抽送による揺れを感じて、そこがまた堪らない。
「あぁぁ、はぁぁっ、あつ、熱、ぃ……タカくん、タカくぅん……！」
いつしかヒナタの口からは、苦痛以外の吐息が漏れるようになっていた。整った眉根には悩ましい縦ジワが走り、閉じた瞳と長い睫毛が可愛らしくて仕方ない。
そして彼女の腰使いも、次第に熱を帯びた妖艶なものに変わっていく。
「あぁ、はあ、っっぁああ、タカ、くぅん……硬いぃ、あんっ！　こすれるぅぅ……！」
――クネっ、クネっ、ちゅぷっ、つちゅぷぷっっ。
形よいヒップが男根を飲みこみ、搾り上げるような動きになる。濡れた内側が規則的に蠢き、見えない処女膣が『女』らしくなっていくのを実感させる。また、くびれたウェストも甘やかにくねり、男根を不規則な抽送で楽しませてくれた。
それは崇之を感じさせると共に――強く女を意識させて。
「はあ、はあ、ヒナタ、オレ、オレぇっっっ！」

――じゅぶぶっ！　じゅぷっじゅぷっ、パン、パンっっ！

「あああああっ⁉　イヤあっ、強いいっっ！　あんっ、あんっ！」

自ら跨り腰振る彼女は、途方もなく――色っぽい。太陽のような笑顔は今は朱色の淫靡な輝きで、汗の玉がキラキラしていて美しい。むき出しの肩も淡く染まり、胸元に至っては今や、ぷるぷるタプりっ！　とエロ可愛らしく踊っていた。

それだけでも目は性欲に漲るが、こちらから強く突き上げると、純情な処女膣がクイクイと締めつけてきて気持ちよすぎる。

「はあっ、ああっ！　締まる、締まるよヒナタ！　柔らかいお肉が、動いてるぅぅっっっ！」

「ああだってっ！　タカくんが、タカくんがおま〇こを、やぁぁああんっっ！」

涙を浮かべて喘ぐ少女は、もはや誰が見ても女の性感に悶えていた。先程のようなぎこちなさは失せ、次第にリズミカルに、少年の動きに合わせるように抽送を繰り返していく。

何度も出入りされた処女蜜壺は、確実に柔らかく成熟していく。硬いカリに掘りこまれるたび、肉のビラビラが優しく絡みついて雄の性感を追い詰めていく。

（ああっ優しいっ！　分かる、ヒナタのオマ〇コが慣れてきて、チンチンをペロペロ舐めてるっっ！）

二人の腰が当たるたびに、ペニスが蠕動（ぜんどう）する肉壺に暖かく吸いこまれる。そして溢れる蜜に滑らされて、ますますヌルヌルと、すべてを吸引されるように摩擦されている。

第五章　ママは恋人志願？

「ヒナタはもうタカユキとセックスしたのでしょう？　あんなに大声でヒィヒィと、ワタクシたちをソデにしてっ」
「ヒ……!?　きっ、聞いてたんですかっっ!?」
「母として息子を暖かく見守っていただけです。けれどあんな……愛情を存分に注いでいただいて。わたしたちも切なくなってしまいます……」
真っ赤になって絶句するヒナタは、迫る美女たちを止められず。その間に二人は、妖しく少年の裸体に絡みついてしまった。
「わわっ!?　リサさん、麻耶さんっ？」
「さ、こちらにお座りください。お背中流しましょうね？」
まるで幼子をあやすような言い方だが、リサも麻耶も完全に女の表情を浮かべている。そして新たに用意された風呂椅子を見て、崇之はギョッと目を剥いた。
「な、なにコレ？　イス？　でも、すごいヘンな形っ」
初見の感想は、プラスチック製の箱型だということだ。サイズは普通の風呂椅子と大差ないが、手前と奥の面がなく、空洞になった箱という印象。しかしよく見ると、座る面であろう上部には中央に縦の隙間があって、どこか縦細の便座を連想させた。
あまりの事態に混乱気味の少年は、促されるまま椅子に座る。するとようやく、その椅子の特殊性を恥部で悟ることとなった。

（わっ⁉　ち、チンチンとお尻、丸出しじゃんか！　スースーするっ）

ちょうど股間が縦空間に収まる形。尻の肉が左右の出っ張りに乗り、ペニスはもちろん、睾丸やアナルも見事にフリーになった。しかも椅子の下は完全に空洞なので、真下から見えてしまうのが物すごく恥ずかしい。

「な、なんなんですコレ⁉　こんなのどっからっ？」

「アラ、言ってませんでしたかしら？　ここは元ラブホテルでしてよ？　特殊なアイテムをお借りしましたの」

正直、こんなところに座らされた時点でエッチな雰囲気丸出しである。崇之は知らないことだが、いわゆる『くぐり椅子』という代物だった。

だからだろうか。麻耶は背後に回ると、背中を流すと言いながら、いきなり股下に手を差し入れてきた。

――するっ。すりっ、すりりっ。

「ひいっ⁉　ま、麻耶さん、そこはっっ！」

「くすっ。まずは大切なところを洗いましょうね？」

窄まった穴を刺激されて、思わず少年は飛び上がった。麻耶の指が優しく肛門を撫で始めたのだ。

これには完全に意表をつかれて、えもいわれぬ感覚に鳥肌が立ってしまう。

まるで寒気のような、ゾクゾクと駆け上がる異様な感覚。けれど彼の反応は黒髪少女をいたく満足させたらしく、そのまま肛門はクリクリとまさぐられてしまった。
「くすくすっ。可愛らしい崇之さん。さぁ、もっとキレイキレイしましょうね？」
「ひっ、ひいいっっ⁉　やめっ、いじらないでぇっっ！」
アナルを触られる経験など皆無なため、初めての感覚にひたすら惑ってしまう全裸少年。
「フフッ、では、ワタクシは腕を洗ってあげますわ。ワタクシの、ココ、でね？」
次いでリサが片腕を取って伸ばしてくる。そしてその腕を跨ぐと、何とそのまま生の股間で挟みこんでしまった。
――しゅりりっ。しゅりっ、しゅりっ、くちっ、ちゅりっっ。
「うわうっ⁉　りぃ、リサさんまでっ⁉」
「んんっ、ぁぁ、いかが？　ぁっ、ママのココ、お気に召しまして？」
閉じた股が腕を挟み、前後運動で刺激してくる。
当然、肌が膣唇に触れて、大切な媚粘膜が擦れてしまう。それでもやめない腰の動きは、まさに淫らすぎる女性のオナニーみたいで恐ろしく興奮してくる。
「なっ、なんてエッチっ‼　二人ともお母さんなんでしょ？　そんなことっ！」
さすがにヒナタも怒り出し、美しい裸身を揺すって地団駄を踏む。しかし日米美女たちは甘い声色で妖しく受け流した。

「ぁぁっ、くすっ。恋人とは認めましたが、母の役目を放棄した覚えはありません。だから、ぁぁっ、息子のお世話をしているんです」
「んっ、んっ、そ、そうですわ。これはマヤとワタクシのママバトル、ぁん、ジャマしないでほしいですわぁ……」
どうやらリサも麻耶も、『これは義母争い』と考えているようだ。ようは『恋人は許すが母は譲らない』と主張したいらしい。
その間も、肛門は触られ腕は恥裂で擦られていく。初めての性快感に股間がみるみる漲ってくる。
（す、すごい、気持ちいいかもっ！　お尻がゾクゾクしてくるし、リサさんのオマ〇コがヌルヌルしてくるしっ）
胸同様、自己主張の強い女腰が淫らに腕を挟みこんで動く。くねる腰つきはまさに妖艶そのもので、ストリップするお姉さんみたいで興奮させられる。さらに濡れた肉ビラがニチュニチュと粘ついてきて、まるで自分が感じさせているみたい。
逆に菊座は指の腹で丹念に撫で回されて、尾てい骨に異様な電流が駆け巡る。こちらは一方的に感じさせられて、どこか責められているような無力感と甘い虚脱感。
「はぁぁ、はぁぁ、うふっ、崇之さん。逸物、硬くなってますね？　素敵……」
麻耶にふうっ、と息を吹きかけられ、耳たぶもゾクリと恍惚に震える。背中に当たるオ

ッパイも、小さいけれど乳首の感触が気持ちいい。
「ああっだめだ、オレ、またエッチしたくなってくるぅっっ」
初めての性感と柔らかい女体の感触が、若い性欲をみるみるうちに滾らせてくる。すでに男根は雄々しくエラを開いてはち切れそうだった。
そして、恋人を取られるのを黙って見ているヒナタではない。彼女の献身は強い恋愛感情と一体化したのだ。
「くっ！　や、やっぱり納得できない！　もう負けるもんかっ！」
ついに恋愛少女も動き、座った少年の前に跪く。目の前で硬くなった彼氏に顔を近づけ、嫉妬も顕に迫ってくれる。
「っわたしが、なっ、舐めてあげるね？　話に聞いただけだから上手じゃないかもしれないけど……ちゅ、ちゅっっっ」
「うっ⁉　あぁぁ、ヒナタっっ」
太長い勃起の先に、可愛い唇が舞い降りた。まさに花弁のような肉にキスされて、興奮と快感でペニスがヒクつく。
しかもスイッチが入ったのか、ヒナタはすぐにパックリと亀頭を頬張ってくれた。さすがに顔が真っ赤で恥ずかしそうだけど、暖かい舌で丁寧にしゃぶっていく。
（う、嬉しいっ。ヒナタ、オレを想ってフェラまでしてくれて。それに慣れてないとこが、

また可愛いし、気持ちいいっ！）

初口淫なのは問うまでもない。しかし懸命に吸引して唇で包みこむ姿は、とても健気で愛しさを誘う。また経験浅い崇之にとっては口に含まれるだけでも十分な性刺激だった。

「まぁ、ヒナタさんもなかなか淫らなこと。これは負けていられませんね」

――ぬりっっ。ぬむぬむうぅっっ！

「ひいいいっ⁉　あヒいぃぃいいいっっ⁉」

またも飛び上がってしまう勃起少年。これまで感じていた肛門刺激に劇的な変化が現れたのだ。

「ひい！　ひうううっっ⁉　麻耶さんっ、指いいいっっ！」

「はぁ、はぁ、ええ、入りましたよ？　崇之さんの初穴、いただきました。くすっ、ビクビクなさって……可愛いっ」

くの字に曲がった中指が、ついに肛内に侵入したのだ。未開の地に触れられた感覚が、一気に背筋まで駆け上がってしまう。

（うっっうそだろっ⁉　オレ、尻の穴に指突っこまれて――すごい興奮しちまうっっ⁉）

最初の一瞬こそ恐慌（きょうこう）にも似た心境だったが、慌ててキュッと締めると、綺麗な指が食いこんで奇妙な恍惚が味わえてくる。さっきの責めと同様の、けれどもう一段高いゾクゾク感が。

さらにクスクスと笑われながら、指を動かされて内側をまさぐられる。すると脳天にまで響く性感刺激で、ペニスはますます暴れ出してしまう。
「はむんっ⁉　んんっ、タカくん、まだ、硬くなるっ。す、すごい……！」
「あぁぁ、やっぱり。物の本にありましたが、殿方のここは海綿体を刺激されるのですね？　こんなに強くなされて、ぁあ、わたし、熱くなってしまいます……！」
もうヒナタも麻耶も、少年を責めながら自身まで昂ぶっていた。可愛い彼が悶えて勃起する様は、母性ある女性の胎内を甘い情欲で潤していく。
もちろんリサはまた別格。こちらは直に恥裂を擦られて明確に性刺激を受けているのだ。黄金色の淫毛がタワシのように腕に絡み、今や愛液でヌルヌルと滑っている。
「ンアッ、アウッ、た、タカユキィィ、いかが？　ワタクシ、気持ち、よくってよ？　ンンッ！」
（リサさん、なんてエロいっ！　もう完全にオナニーだよっ！）
すでに洗うという名目もなく、自らの入り口を息子の腕で慰める。腰をくねらせて蕩ける眼差しが、もう娼婦のように淫猥だった。
「ッハァ、ハァ、ッッフフッ、も、もっと、洗ってあげますわ。ワタクシの、ココで……ンウウッ‼」
「うっ⁉　ああリサさあんっ！」

ヌチュリッ、という音と共に、今度は指が恥裂の中に招かれてしまう。そして美女は、その成熟した膣肉でもって指を洗い始めたのだ。

――ヌリュッヌチュッムチュッムチュリリッッ！

「アァウウウウンン!!　ッッアア、ハァ、ハァ、いぃ、いかが？　ワタクシのヴァギナはアアッッ！」

「ああっすごいですっ！　ヌルヌルのお肉がいっぱい詰まってますっっ！」

何度か経験のある膣内は、淫らな欲求にも敏感に応えていて艶かしい。指で感じる肉襞の感触は気持ちよく、めくりあげるとビクッ！　と震えるのも興奮する。

いわゆる『壺洗い』という行為。名目は指を膣で洗うというものだが、どう考えても愛撫以外の何物でもない。

（ぬ、ヌルヌルしてるっ。リサさんの中、暖かくて柔らかくて、指、ふやけちゃいそう！）

今や崇之は奇妙な淫行に惑わされるばかり。指では豊満美女の膣肉を味わっているのに、逆に尻では痩身美少女の指に味わわれている。そしてペニスはブラウンヘアの恋人によって、濃厚なフェラチオをされていた。

「んっんっんっんっ！　タカくん、ビクビクしてる。気持ちいいの？」

「ぁぁあ、もちろんだよ。みんな気持ちいいし、ヒナタの口もすごくよくって。オレ、やばいかもっ」

アナルとフェラの同時責めで性感が痺れ、女体の壺洗いで興奮状態。これで射精欲が高まらないわけがない。それに内側のビラビラを撫でてあげるとリサが可愛く身悶えるのだ。男としての優越感まで昂ぶってしまう。

しかし散々高められたブロンド美女も、もう我慢できなかった。

「ハァ、ハァ、もうダメヒロユキ、ワタクシを、ママを貫いてっっ！」

入念な壺洗いから一転、飢えた獣のように迫るリサ。切羽詰まったようにヒナタを押し退けて目の前で四つんばいになる。

そしてパンパンに発達したヒップを自ら押しつけると――ズブズブズブッッと、そのまま膣に勃起を飲みこんでしまった。

「ハアアアアッ！　き、気持ちいいっ！　わっ、ワタクシっ、夢中になってしまいますわあっ！」

あまりに艶かしい豊満女体が、腰を振って男を味わい始める。早くも肉慣れたヒダヒダによって、サオとカリが気持ちよく擦られていく。

「ああっ⁉　リサさん、タカくんとっ！　お母さんなのにいっ‼」

「あらあら、まるで犬みたいにはしたないですね？」

「だぁ、だってアンッ！　ワタクシっ、疼いて疼いて……アン！　アンアンアアアンン‼」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／690円（税込）

呪詛喰らい師2

［小説：蒼井村正／挿絵：或千せねか］

全国書店で好評発売中

凄腕退魔士の咲妃を牝奴隷に堕とす新たな敵の登場!

思春期なアダム4 聖域の崩壊

［小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃］

全国書店で好評発売中

少女天使の暴走が平和な学園生活を破壊する!!

シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

オトミコ！ 僕は男の巫女娘

［小説：大熊狸蓄／挿絵：大空樹］

全国書店で好評発売中

男の子と女の子——

二つの性の間で揺れ動く男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙獄学艶戦姫ノブナガ!! ①〜③
- ビルグリムメイデン ①〜③
- 不死の吸血鬼がドSのご主人様を募集しているようです
- 思春期なアダム ①〜③
- 呪詛喰らい師【カースイーター】
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!
- 借金お嬢クリス ①〜③
- 無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!